



広報

土づくり

苦労して挑戦を重ねて

北九州市在住の柴田智恵子さんは、様々な苦労を乗り越えながら、前向きに、そして時には大胆に人生を歩み続けています。今回は、度重なる病と闘いながらも決して諦めることのない柴田さんにお話を伺いました。



プロフィール
名前: 柴田智恵子
生年: 昭和20年5月18日
居住地: 北九州市
障害名: 脳性小児麻痺 頸椎症

■日本への引き揚げ (智恵子さん0歳)

韓国の京城で生まれ、生後2カ月半が過ぎた9月、終戦で日本へと引き揚げました。引き揚げ船の中で私は眠っていましたが、赤ん坊が泣くと皆イライラして、赤ちゃんを連れた母親から赤ちゃんを奪い取って甲板から投げ捨てたり、親子ともども海に飛び込んだりする状況だったと両親から聞いています。

舞鶴に引き揚げたからは、

箱根にあった母の実家の別荘に向かいました。その後、父親が一人で戦後の焼け野原だった東京に行き、建設会社を立ち上げて成功。そこで母は最初の座っていない私をおんぶし、兄を連れて東京へ向かい、家族4人で暮らすことになりました。

■脳性麻痺の診断 (智恵子さん3歳)

大病院で脳性麻痺の診断を受けたのは3歳の時です。それから整体院に通院し、首が座り言葉が出るようになりまりました。マッサージの先

生に頭を叩かれ首をひねられた記憶があります。5歳には歩けるようになって近所ですら楽しく遊んでいました。

■学校生活 (智恵子さん7歳)

小学校は普通校に入学しました。学校へ行くのが大好きで、勉強も大好きでした。ただ足首が曲がりにくい為にトイレで苦労し、便器の中に左足が落ちてウン〇が付着。そのショックでトイレを我慢する人生が始まりました。楽しい思い出は、誕生日会で皆の前でおもちゃのピアノを弾いたり、仮装で皆がマッチ売りの少女やシンデレラの格好をしている中、私は不良少年の格好をしてシガレットチョコをくわえながら歩いたことです。

■神奈川県にて (智恵子さん13〜20歳)

中学時代は「あなたは高校行けないでしょ」と、ある女の子からバカにされてたんです。でも成績がトップだったのでレベルの高い高校に行けて、その子には羨ましがられました。「ざまーみる」と思いました(笑) 高校卒業後は大学に進学しようと思っていました。でも

高2の時に父が亡くなって、金銭的な面で大学には行けず、相模原にある障害者向けの職業訓練所に行かされました。そこで1年ほど寮生活をし、初めて自分以外の障害者に出会い、寮友からリハビリができる場所があるとこの決意し、横浜の「保土ヶ谷身体障害者更生指導所」へ入所しました。

そして、その指導所で11歳年上の主人と知り合いました。主人は20歳の時、田んぼに虫が出たので父親と2人でアメリカ製の殺虫剤を防護装備なしで散布し、その毒が身体に回った結果障害者となりました。主人から「結婚しよう」「2人で人生頑張ろう」と言われ、結婚を決めました。母には「私の人生は壁だらけで、結婚してもダメだったら帰って来るわ」と言ったんです。そうしたら母も「いいわよ、帰ってらっしゃい」と言ってくれて、心が決まりました。そこから主人の実家のある福岡県遠賀郡での生活が始まりました。



■結婚生活 〜福岡県遠賀郡暮らし〜 (智恵子さん21歳〜)

遠賀郡は田舎でした。主人の実家は大家族で、その中で暮らすことになったのですが、都会のネオンが恋しくなるような生活でした。私は自分の事はなんとか出来ましたが、家事は何もできず、農家だったので起床も就寝も早かったです。特に、朝4時に主人から「兄嫁の手伝いをしろ」と起床させられましたが、兄嫁に何か手伝うことがあるかと聞けば「よか(別にいいよ)」と言われ、手持無沙汰のまま待たされるイジワルをされました。お風呂は露天風呂だったので、裸を見られないように真つ暗になってから入って石の上で身体を洗つて大変でした。

■小倉にて (智恵子さん25歳〜)

北九州市の小倉に落ち着いて息子が生まれ、主人と二人三脚で息子を育て上げました。息子が4歳くらいから毎日一緒に図書館に通い、5歳で幼稚園に入園しました。幼稚園は送迎が必要だったので、息子を送り届けた後は一人で図書

館で過ごし、勉強や編み物をしていました。幼稚園のクリスマス会のために何日もかけて作った長靴型の布袋は、当日、拍手喝采の中で息子が満面の笑みで受け取ってくれて、今でも忘れられない思い出です。

■老化の地獄

(智恵子さん44歳)

息子が中学1年の時に主人の勤めていた会社が倒産し、主人は失業したんです。生きるために、その頃はまだよく知られていなかった制度を利用して、息子を中学、高校、大学へ進学させることができました。

■主人没

(智恵子さん61歳)

私が61歳の時、主人が亡くなり、44年の夫婦生活が終了しました。そこからはやっと自立することができ、自由に過ごし一人暮らしを楽しみました。北九州大学の公開授業に参加したり、東京や神奈川に行つて友達探しの旅行に出かけました。

■パソコンを習つ

(智恵子さん63歳)

私はエッセイや経験談を書くのが好きなので、文章を書き続けていました。またパソコンを習つて、メールで友人の編集者に本の出版を依頼しました。このように新しく何かに挑戦するのが楽しいです。やっぱり私の中に



には「頑張ろう」という気持ちがいっぱいあるんです。ダメだっと思つたら、そこで終わり。

■頸椎症の悪化

(智恵子さん69歳)

頸椎症が悪化し、介護保険制度の利用を始めました。病院、ショートステイ、デイサービス等を行脚しました。一方で、10年間にわたつて、自分の筋緊張が嫌で入浴拒否をしました。そして最初は歩いてもいきましたが、生活と体の変化により車いす生活が始まりました。

■重度訪問介護をスタート

(智恵子さん76歳)

土屋さんを利用して丸2年、色々な人が終日自宅に来てくれて、今のようになつてくれる幸せを満喫しています。私は寝たきりの状態になりたくないのです。毎日介助されるのが新たな挑戦です(介助する人される人ハラハラドキドキ命懸け)。

去年の10月には、念願のお風呂場に行くことができました。10年ぶりの我が家での初めてのシャワー浴は緊張が伴うものでした。けれど回数を重ねていく中、私も介助者たちも慣れていきました。慣れるしかない。「頑張るぞ!」

お知らせ

今年も宜しくお願いします。土づくりは本年から季刊号となります。

広報・土づくりへのご意見・ご感想



土屋グループの各種取組みについてのご意見や、当社介護サービスにおいて虐待や不当な身体拘束が疑われる場合がありましたらご一報ください。ご意見・お問い合わせ窓口 client@care-tsuchiya.com 発行元:株式会社土屋 住所:岡山県井原市井原町192番地2 久安セントラルビル2階



争奪 心配は止められない
先日、夫婦二人で健康診断に行つて来ました。とても大きなセンターですが、男女一緒に受けられるので昨年から利用しています。以前の受診場所は女性と男性の階が分かれていて、私が同行できませんでした。ですから、夫に初めて接する方の扱いで首や肩を痛めて頸椎症が進んでしまう様なことにならないか、車いすをぶつけて頭の頂点まで響くような扱いをされないかと、私自身の血圧にも悪影響ではと感じる程、心配をしてみました。それに比べてこちらは、準備された患者衣に着替えるのも、夫婦で入れる個室を用意してくれ、健診自体も血圧、採血、視覚聴覚検査、エコー、レントゲン...と、其々の部屋を二人で巡って、車いすからの移乗や、腕や頭を支える事なども私が一緒にでき、とても安心して受診できました。きっとお任せしてしまつても大丈夫だとは思いますが、万が一を考えてしまつたのです。この私の根拠の無い心配は、「アテンダントが慣れたと思つたら代わつてしまふ。慣れるまでが心配」「慣れている人にずーっと傍にいて介助・介護して欲しい」というお気持ちと似ているかもしれません。さて、健康診断自体は、私の身長がまた1cm低くなつたこと以外は、夫婦とも「歳相応に健康」でした。めでたし、めでたし。
こもとゆみこ(夫が脳性麻痺1種1級)